

自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科学習指導に関する開発的研究Ⅲ

ー共によりよい自分の生き方について考えるよさを実感する学びの可視化についてー

榊 将和 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

上ノ町 亮 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Developmental Research on Guidance for Moral Education to Deepen Thoughts on How to Live Better and Focus on Oneself Ⅲ: Visualizing Learning that Enables Students to Realize the Goodness of Thoughts on How to Live a Better Life

SAKAKI Nobukazu and UENOMACHI Ryo

キーワード：自分を見つめること、よりよい生き方、共に考える、よさを実感すること、学びの可視化

1. 研究の背景

1.1. 研究の概要

人間は本来、人間としてよりよく生きたいという願いをもっており、この願いの実現を目指して生きようとするところに道徳が成り立つ。道徳教育は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等が進む中、主体的に判断の下に行動し、自律した一人の人間として他者と共によりよく生きようとしながら、社会の変化に対応しその形成者として生きていくことができる人間を育成する上で、これからも重要な役割をもっている。その道徳教育の要となる「特別の教科道徳」においては、子どもたちが多様な価値観の存在を前提として「自分はどうか」「何を大切に生きるのか」といったよりよい自分の生き方についての考えを深めていくことが大切である。この「よりよい自分の生き方についての考え」を深めていくためには、子どもがこれまでの生活経験を通してもっている価値観を、他者の価値観を受容しながら再構成し、それを基に、自分の生き方についての考えを深めていく必要がある。また、自分の生き方についての考えを深めていくために、どのような学び方をしたのかという自分の学びの過程を、子ども自らが可視化して捉えることも、道徳科の学習を主体的に進める上で大切である。そこで、このような学びを子どもが行うためには、どのような資質・能力を育むことが必要であるかという道徳科で育む資質・能力を整理することや、設定した資質・能力を育むための学習内容、その学習内容を子どもがどのように考え、学んでいくかという学び方について、研究を進めていくことにした。

1.2. 研究の経過

まず、1年次研究においては、道徳科授業において目指す子どもの姿を、「自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める子ども」と設定し、道徳科で育む資質・能力を整理した。また、これらの資質・能力を育むために、自分を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める道徳科授業を「これまでの自分を見つめて考えていきたい問いをもち、互いの多様な価値観を受容したり、自分の生活とつなげて考えたりしながら道徳的価値観を再構成し、よりよい自分の生き方についての考えを深める授業」と捉えた。

次に、2年次研究では、1年次研究の成果と課題を踏まえ、子どもが、「様々な事象を道徳的諸価値の理解を基に自己との関わりで多面的・多角的に捉え、自己の生き方について考えること」という道徳科における見方・考え方を働かせながら、子ども自らが自分にとって大切にしたい考えやよりよい生き方につながる考えを見だし、他者と共に考えるよさをこれまで以上に実感することができる授業改善を行うことが必要であると捉えた。

そこで、道徳科における見方・考え方を働かせる様相を基に、共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容設定の要件（視点）として具体化し、以下のように設定した。

【共によりよい生き方について考えるよさを実感する学習内容の要件（視点）】

- 自分との関わりで問いをもつことができる。
- 多様な価値観を比較・関係付けながら、受容して考えることができる。
- よりよい生き方について、自分なりの考えを深めることができる。

そして、子どもが、共によりよい生き方について考えるよさを実感するために、子どもが問いをもつ様相を踏まえた実態分析や、多様な価値観を受容しながら考える学び合う活動の設定という重点を基に授業実践を行った。これまでの2年間の研究や実践を通して、以下のようなことが明らかになった。

表1 成果と課題

	成果と課題
成果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 多様な価値観を前提にして、他者の価値観と比較・関係付けしながら問題意識をもつ姿が見られた。 ○ 自分が大切にしたい考えの理由を明らかにして交流することで、自分の生き方についての考えを深めようとする姿が見られた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ● 他者の価値観を受容しながら考えるという学び方が、よりよい自分の生き方についての考えを深めることにつながったのだという自覚ができていない子どもの姿が見られた。 ● 子どもによっては、自分の価値観と異なる価値観を受容して考えることが難しく、自分の生き方についての考えを深めることが難しい姿があった。

2. 研究の方向

これらの要因から、子どもが、よりよい自分の生き方についての考えを深めることができたということやどのような学び方をしたから考えが深められたのかという学び方を自覚することが必要だと考える。したがって、教師は、子どもにどのような価値観を表出させ、どのように思考させるのかを構造的に捉え、授業において子どもが、学びを可視化することができるように効果的に働きかけることが大切であると考え。そうすることで、子どもは、よりよい自分の生き方についての考えを深めることができることに加え、学習内容を学び取ることができた学び方を自覚することができ、次の学習においても生かそうとすると考える。

これらのことから、本研究では、共によりよい生き方について考えるよさを実感するために、子どもが学習内容をどのように学んでいくのかということを構造的に想定し、それを可視化できるように働きかけを授業レベルでさらに具体化していく。

3. 研究の内容

3.1. 共によりよい自分の生き方について考えるよさを実感する思考方法とは

共によりよい自分の生き方について考えるよさを実感するための思考とは、自分を見つめ、多様な価値観を比較・関係付けながら受容して、自分との関わりで考えることである。なぜなら、図1のように「親切にすると、断られたらどうしようという気持ちになるけれど、相手の状況や立場を考えるといいと思うよ。」「AさんやBくん、Cくんの考えを聞いて、今まで気付かなかったことを考えることができたよ。」というように、よりよい生き方についての考えを自分との関わりで深めたり、他者との学び合いのよさを感じたりすることを、共によりよい生き方について考えるよさを実感する様相と捉えているからである。(図1)

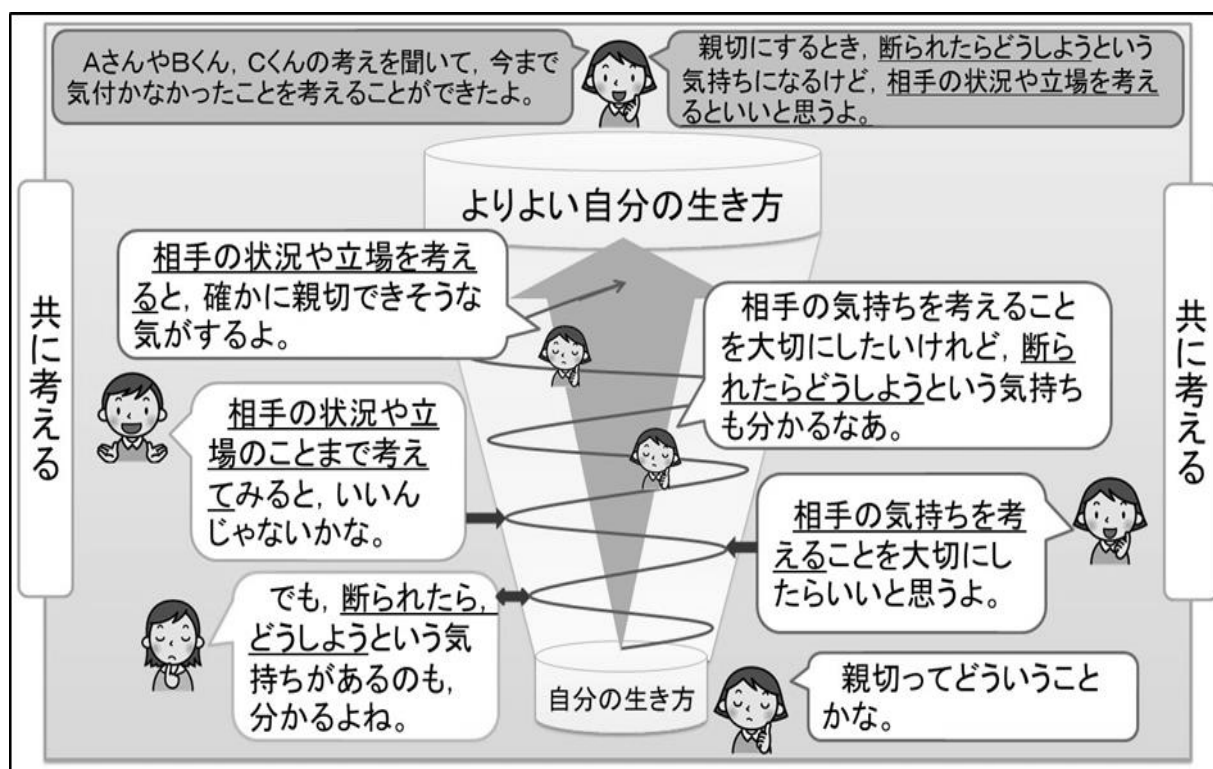


図1 共によりよい生き方について考えるよさを実感する様相

自分を見つめるとは、子どもが問題意識をもって道徳的な課題を自分との関わりで考え、道徳的価値を自分のこととして感じたり考えたりしながら問いをもつことである。また、多様な価値観を比較・関係付けながら受容するとは、他者の価値観と自分の価値観を、比較・関係付けの思考方法を用いながら、自分の大切にしていきたい考えとして道徳的価値観を再構成していくことだと言える。比較・関係付けの思考方法を、授業での子どもの言葉を基に分析すると、具体的には、自分との関わりで考えるために、自分と他者の類似点を考えることや自分の立場を他者の立場に置き換えて考えること、他者の価値観の理由を自分の経験から考えることがある。また、自分と異なる価値観と比べて相違点を見つけたり、自分の価値観と反対の価値観で物事を考えたりすることもある。思考方法を分析するだけでなく、これらの思考方法を用いて、子どもが、どのように学んでいくのかを構造的に想定し、可視化することが大切である。

3.2. 共によりよい自分の生き方について考えるよさを実感するための学びの可視化とは

共によりよい自分の生き方について考えるよさを実感するための学びの可視化とは、子どもが、どのような問いをもち、多様な価値観を前提にして、どの価値観同士を比較・関係付け、どの価値観を受容しながら自分の生き方についての考えを深めていくのかという学びの様相を具体的に想定し、構造的に示すことである。

以下に、第4学年 主題名「きまりが守れたら」教材名「道子の赤い自転車」(学研教育みらい)で学びの可視化の例を述べる。第4学年の子どもたちは、自分たちで決めた身近な約束やきまりを守る大切さに気付いている一方で、公共物や公共の場所での社会のきまりについて考えることが少なく、社会の決まりを守れないことがある。このようなことから、子どもたちに、集団生活の中で、よりよい人間関係を築いたり、集団の向上を目指したりする上で、社会の決まりを守ることがなぜ大切であるのかということを考えさせることで、進んできまりを守りながら生活していこうとする態度を育てていく必要があると考えた。

そこで、本時の学習では、以下のような学習内容を設定した。

- 自分の価値観と他者の価値観を比較・関係付けて、「きまりを守るとはどういうことだろうか。」といった自分との関わりで問いをもつことができる。
- 「みんながきまりを守っていなかったら、自分も守れなくても仕方ない。」「周りの人の迷惑になるかどうか考えれば、守れると思う。」といった多様な価値観を比較・関係付けて受容することで、「きまりを守ることは、難しいけれど、周りの誰かの大変な迷惑になるかもしれないと考えれば守れそうだ。」といった自分の大切にしたい考えをもつことができる。
- 「きまりを守ることは難しい時もあるのだな。」「自分も周りの人の気持ちを自分のこととして考え、守っていききたいな。」といった自分の経験を想起しながらよりよい自分の生き方についての考えを深めることができる。

これらの学習内容を、子どもたちが、これまでに述べた思考方法を用いて、どのように学んでいくかを、図2のように、構造的に想定した。図2では、主に児童Bの学びを中心に想定して学びの可視化の例を述べる。(図2)

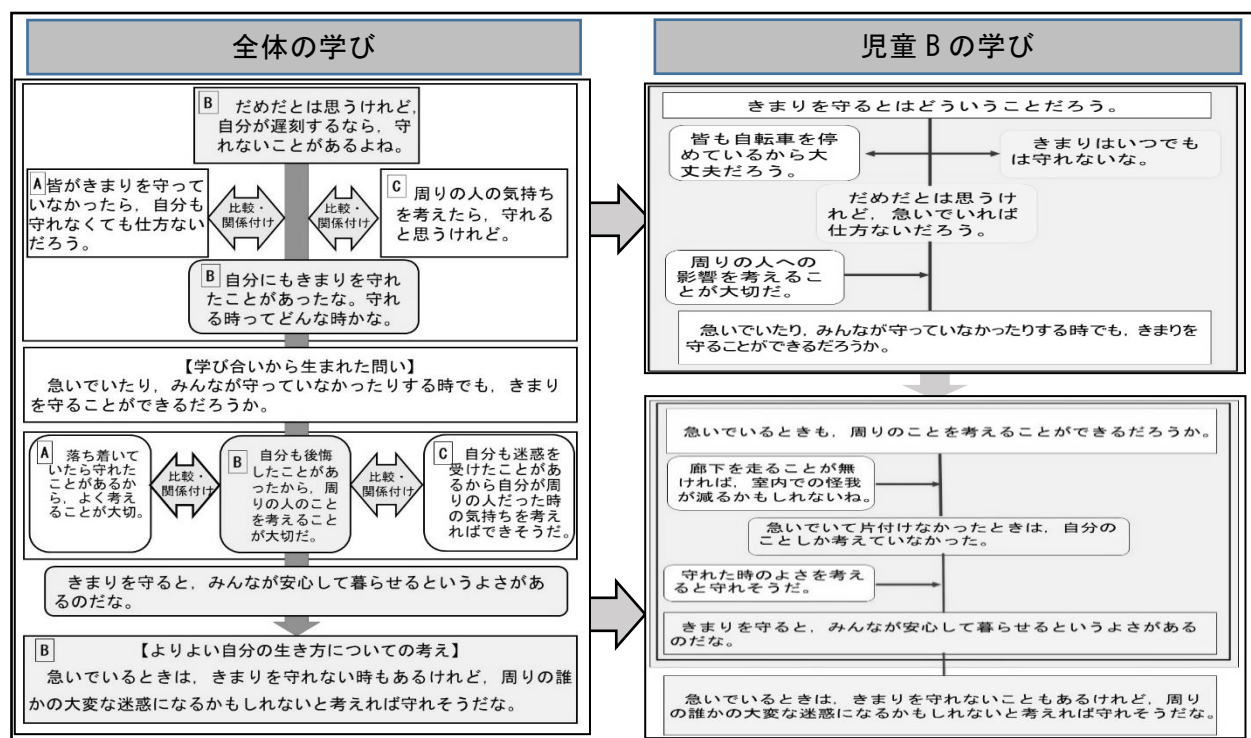


図2 主題名「きまりが守れたら」の学習における学びの可視化

児童Bは、教材の主人公が、きまりを守れない行動をした際の「みんなも自転車を停めているから大丈夫だろう。」という価値観と「きまりはいつでもは守れないな。」という自分の価値観を比較して考えることで、「だめだとは思いますが、急いでいけば仕方ないだろう。」といった自分と主人公の類似点を見つけると想定した。また、他者の「周りの人への影響を考えると、きまりを守ることが大切だ。」という価値観を関係付け、受容することで、「急いでいるときも、周りのことを考えることができるだろうか。」という問いが生まれると想定した。さらに、他者の「廊下を走ることが無ければ、室内での怪我が減るかもしれないね。」という他者の経験を聞き、自分の価値観と関係付け、受容することで、「急いでいて片付けができなかったときは、自分のことしか考えていなかった。」という自分の経験を想起することができると考える。そして、他者の「守れた時のよさを考えるときまりを守れそうだな。」という価値観を関係付け、受容することで、「きまりを守ると、みんなが安心して暮らせるというよさがあるのだな。」というように、自分の道徳的価値観を再構成することができると想定した。このような学びを想定しておくことで、「急いでいるときは、きまりを守れないこともあるけれど、周りの誰かの大変な迷惑になるかもしれないと考えれば守れそうだな。」という自分の生き方についての考えを深めることにつながると考える。

3.3. 道徳科授業において学びを可視化することのよさ

共によりよい生き方について考えるよさを実感する道徳科授業の学びを可視化することで、子どもと教師の双方にとってのよさがある。子どもにとっては、自分の生き方についての考えをさらに深めることができる。また、その学び方を振り返ることで、学び方のよさを自覚し、次の学習にも生かそうとすることができる。その結果、共によりよい生き方について考えるよさを実感することができると考える。教師にとっては、働きかけがより明確になることによって、効果的に働きかけることができるというよさがある。

4. 研究の実際

3.1. 実践の立場

本実践は、共によりよい生き方について考えるよさを実感するために、子どもが学習内容をどのような思考方法を用いて学んでいくのかを想定し、可視化することが子どもの学びに有効であったかを検証するために行った。

第4学年

○主題名：「親切になるのかな」 ○内容項目：親切，思いやり

○教材名：「わたしのおもてなし」（学研教育みらい）

3.2. 実践と考察

(1) 第4学年 主題名「親切になるのかな」における学習内容

- 自分の価値観と他者の価値観を比較・関係付けて、「親切とは，どういうことだろう。」という問いをもつことができる。
- 「相手のために自分から行動しているから親切になる。」「相手の立場や状況まで考えて親切にするとよいと思う。」といった多様な価値観を比較・関係付けて受容することで、「相手の状況や気持ちまで考えて，相手に親切にしていきたい。」といった自分の大切にしたい考えをもつことができる。
- 「自分の考えだけでは，親切にならないこともあるのだな。」「相手の状況や気持ちまで考えて，相手に親切にしていきたい。」などといった自分の経験を想起しながらよりよい自分の生き方についての考えを深めることができる。

(2) ねらい

表2 ねらい

知識及び技能	思考力，判断力，表現力等	学びに向かう力，人間性等
相手のことを思いやり，進んで親切にすることについて，「互いが気持ちよく生活できる」「相手の状況や気持ちを考える」「相手の立場に立ち，自分のこととして考える」などの意義や心構えの大切さを自分の生き方との関わりを通して理解することができる。	相手のことを思いやり，進んで親切にすることに関わる見方・考え方・感じ方を他者との関わりの中で，自らの体験場面での内面と関係付けて考え，表現することができる。	相手のことを思いやり，進んで親切にすることに関わる自分自身の生き方を見つめ，相手の立場に立ち，相手のことを思いやり，進んで親切にしていこうとする気持ちを高めることができる。

(3) 第4学年 主題名「親切になるのかな」における思考方法と学びの可視化

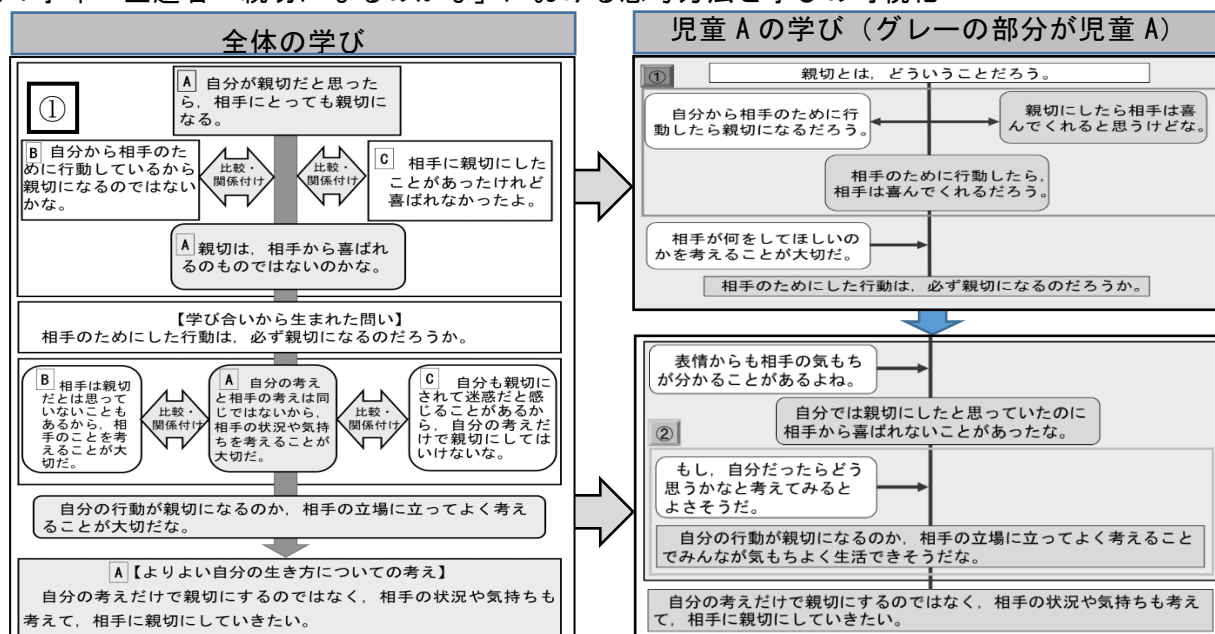


図3 主題名「親切になるのかな」の学習を想定した学びの可視化

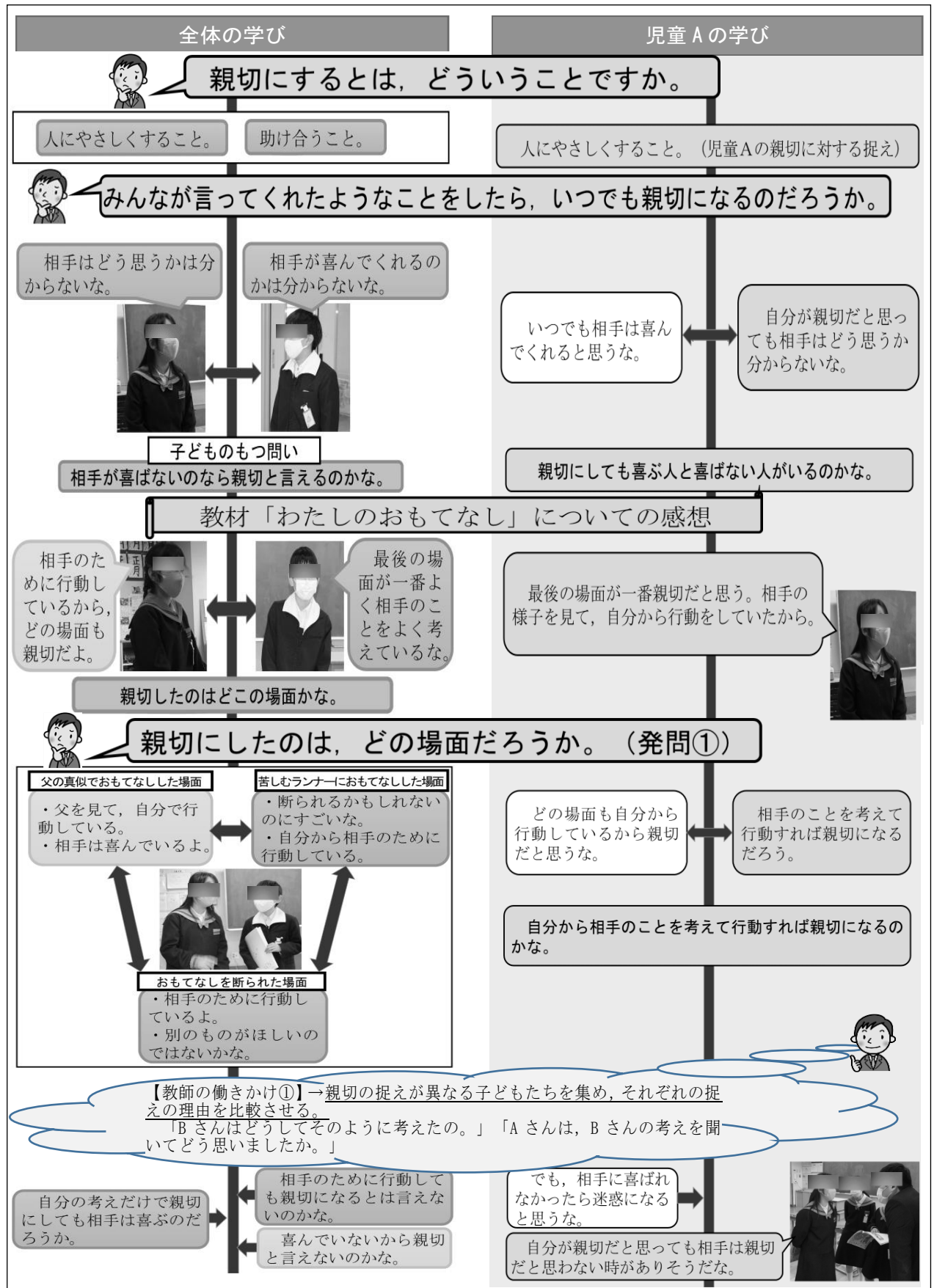
設定した学習内容を、子どもたちが、比較・関係付けという思考方法を用いてどのように学んでいくかを、図3のように構造的に想定した。図3では、主に児童Aの学びを中心に想定して学びを可視化したことを示している。

設定した学習内容においては、「自分の考えだけで親切にするのではなく、相手の状況や気持ちも考えて、相手に親切にしていきたい。」というよりよい生き方についての考えを深める必要があると想定した。そのためには、子どもたちが「自分は相手のことを思って行動しても、相手がどう思うかは分からないから、いつでも親切になるとは言えないのかな。」という問いをもつ必要がある。その問いを基に、「相手のためにした行動は、必ず親切になるのだろうか。」と発問を設定する。「相手のためにした行動は、必ず親切になるのだろうか。」という問いを子どもがもつための学び合う活動を想定すると、図3左①のようになると考えた。図3左①のような学び合う活動を行うためには、「自分が親切だと思ったら、相手にとっても親切になる。」「自分から相手のために行動しているから親切になるのではないかな。」といった価値観を比較・関係付けさせる必要がある。このような価値観を表出させるためには、「親切にした場面は、どの場面だろうか。」と問う必要があると考えた。

児童Aの学びとしては、教材の主人公が相手のために行動した場面で「自分から相手のために行動したら親切になるだろう。」という価値観と「相手のことを考えて親切にしたから、きっと相手は喜んでくれるだろう。」という自分の価値観を比較して考えることで、自分と主人公の類似点を見つけると想定した。また、他者の「相手がしてほしいことを考えることが大切だ。」という価値観を関係付けて受容することで、「相手から喜ばれなかったら親切だと言えるかな。」という問いが生まれると想定した。さらに、他者の「表情からも相手の気持ちが分かることがあるよね。」という経験を聞き、関係付けて受容することで「自分では親切にしたと思っていたのに相手から喜ばれなかったことがあったな。」という自分の経験を想起することができると考える。そして、他者の「もし、自

分だったらどう思うかなと考えてみるとよさそうだ。」という価値観を関係付けて受容することで、「自分の行動が親切になるのか、相手の立場に立ってよく考えることでみんなが気持ちよく生活できそうだな。」というように、自分の道徳的価値観を再構成することができると想定した。

(4) 本時の実際



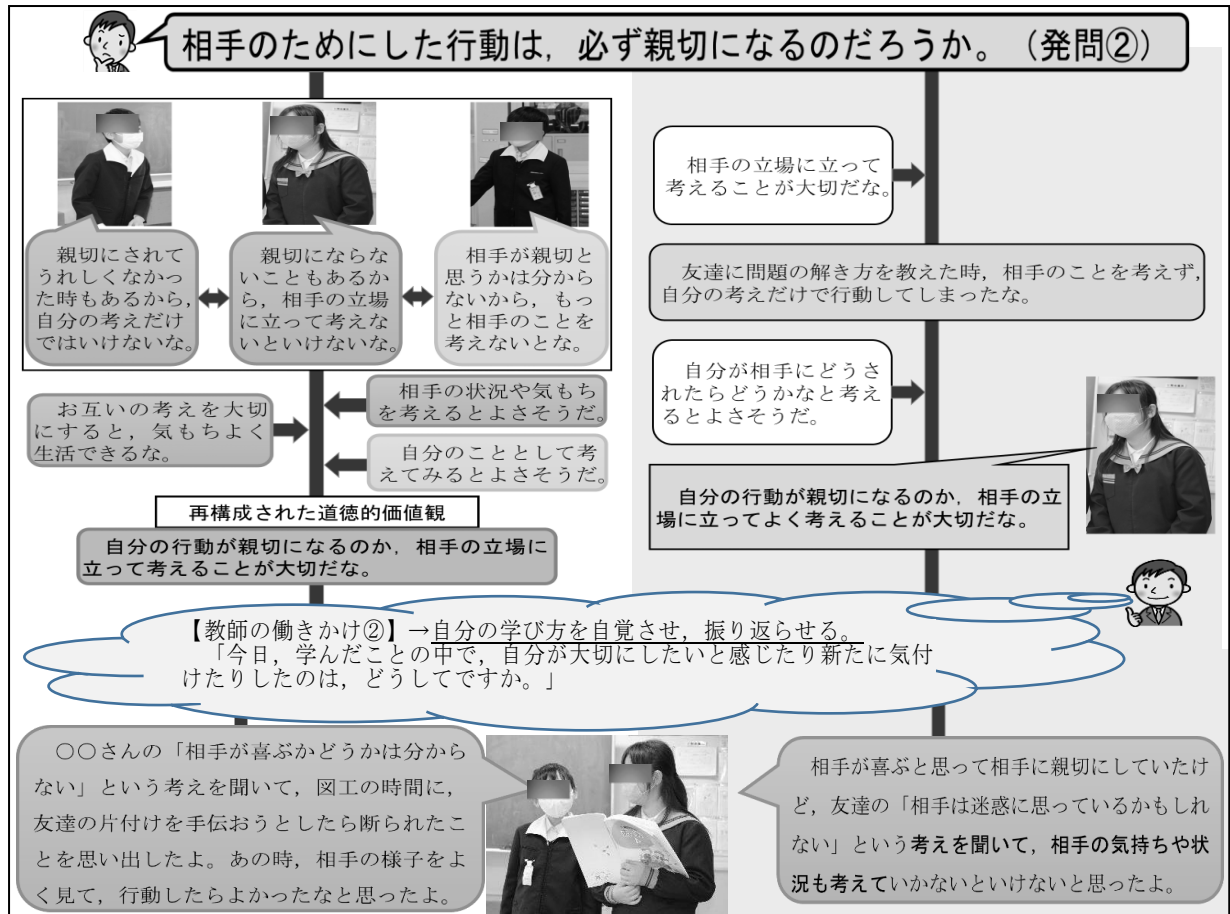


図4 本時の実際の具体

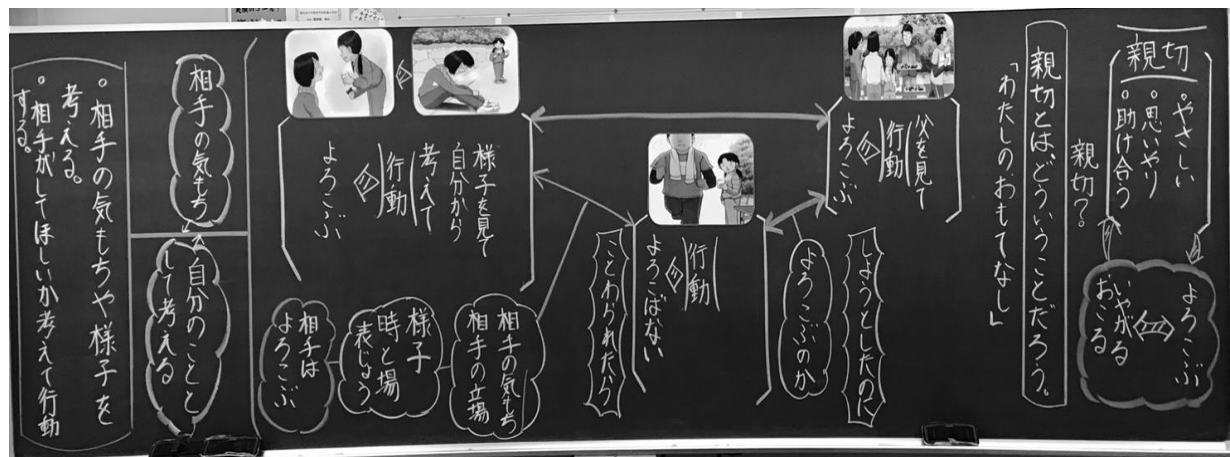


図5 教材名「わたしのおもてなし」で学びを可視化した実際の板書

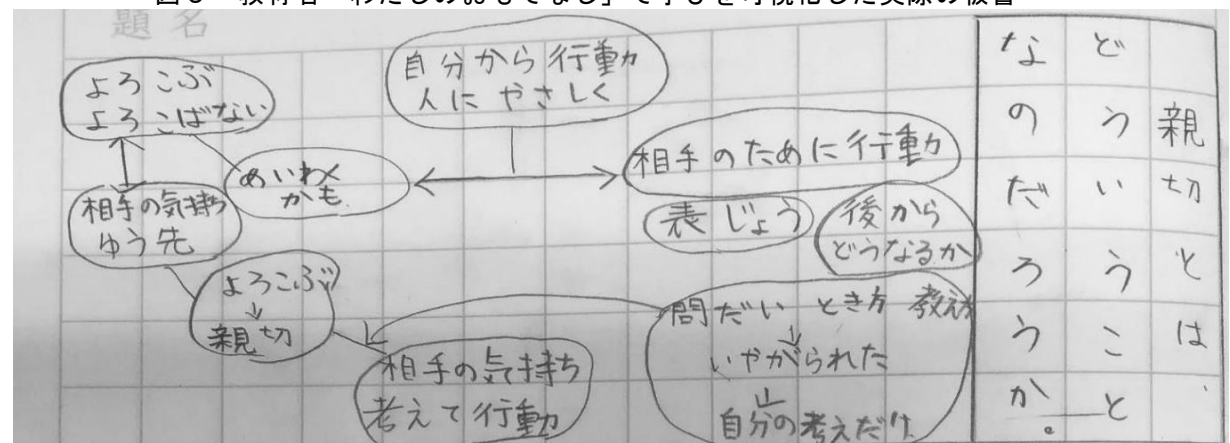


図6 子ども（児童A）の学びの可視化

(5) 考察

教師が、「相手のために行動しても喜ばれないのなら親切だと言えない。」「自分が相手のために行動したら親切になる。」といった価値観を比較・関係付けながら考えていく学びを想定し、可視化したことで「親切にしたのは、どの場面だろうか。」という発問を設定することができた。また、この発問から、子どもが、どのような価値観を比較・関係付けていくのかという学びを想定し、可視化したことで、「相手のためにした行動は、必ず親切になるのだろうか。」という発問も設定することができた。さらに、構造的な板書や自分の学びを自覚させ、振り返らせる働きかけも具体化することができた。

子どもたちは、図5のように、自分なりに比較・関係付けの矢印を用いて自分の学びを可視化したことで、「相手の気持ちを優先する。」といった自分の受容した価値観を明確にし、自分なりの道徳的価値観を再構成する姿が見られた。また、再構成した道徳的価値観を基に「相手が喜ぶと思って親切にしていたけど、友達は迷惑に思っているかもしれないという考えを聞いて、相手の気持ちや状況も考えていかないといけないなと思った。」といったよりよい自分の生き方について考えを深める姿が見られると同時に「友達の考えの考えを聞いて親切についての考えがまとまった。」といった共によりよい生き方について考えるよさを実感していた。

5. 研究の成果

教師にとっては、子どもたちがどのような価値観を比較・関係付けながら学んでいくのかを可視化したことで、構造的に板書を想定することができたり発問や教師の働きかけをより明確に授業に位置付けたりすることができた。また、子どもにとっては、教師の学びを振り返る働きかけを基に、ノートに自らの学びを可視化したことで、どのような価値観を比較・関係付け、どの価値観を受容して道徳的価値観を再構成することができたのかという自分の学びを振り返りやすくなり、自分の生き方についての考えを深めるよさとともに、その考えを深めることができた学び方のよさも感じながら、共によりよい生き方について考えるよさを実感する姿が見られた。

付記

本報告は、鹿兒島大学教育学部附属小学校令和元年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき、その研究成果をまとめたものである。

参考文献

- ・ 青木孝頼・金井肇・佐藤俊夫・村上敏治 (1975)「新道徳教育事典」, 第一法規出版
- ・ 假屋園昭彦他・馬場智也・小峯三朗・京田憲子 (2014). 教師と児童とが対話をとおして道徳的価値を発見する授業デザインの開発 (Ⅱ) (鹿兒島大学教育学部研究紀要 (教育科学編), 第 65 巻, 87-123.
- ・ 田村学 (2018)「深い学び」, 東洋館出版
- ・ 文部科学省 (2018)「小学校学習指導要領解説」 特別の教科道徳編, 廣済堂あかつき
- ・ 文部科学省 (2008)「小学校学習指導要領解説道徳編」, 東洋館出版